

高速炉開発について (見解)

(参考資料①)

2017年1月13日

内閣府の原子力委員会がこんな文書（A4で3ページ）を出しました。昨年末には「軽水炉利用について（見解）」そして年明け早々これ。何が書いてあるのかを見ておきましょう。

高速炉開発を含む核燃料サイクルを推進するとの方針を前提として、今後の取組に関して留意すべき点について、原子力委員会としての見解を述べる。

1. 核燃料サイクル推進にあたっての「戦略的柔軟性」の確保

国内での技術の蓄積・成熟動向を
一歩一歩確認しながら進めることが望ましい。
そうした観点からは、状況の進展に応じて
**「戦略的柔軟性」を持たせながら
対応を進めていく姿勢が重要**

2. 商業利用を念頭に置いた高速炉開発

「もんじゅ」の反省を踏まえて、
今後の開発の方策をしっかりと検討する必要がある。

「もんじゅ」を建設したことによる目的は
ある程度達成されたと考えられる。

最も重要な「もんじゅ」の教訓は、
様々なトラブルによって研究開発期間が
当初の想定以上に長期に及ぶとともに、**(中略)**
高速炉の実現やその商業化に向けた道筋が
不明確になってしまったことである。

今後は、**商業化を具体的に念頭において、高速炉の研究開発を進めるべき**である。

その際、**高速炉の開発・建設コストの低減に努めつつ、国際的なウラン資源の賦存状況に留意するとともに、高速炉の最終的な廃棄処分のコスト等も含め幅広い視野での減容化・有害度低減について適切に評価**することが求められる

「賦存（ふそん）」
天然資源が、利用の可否に
関係なく、理論上算出された
ある量として存在すること
(大辞林)

3. 電力事業の競争環境を踏まえた高速炉商業化の条件や目標の検討

今後の高速炉開発にあたっては、**商業化を目指して目標設定**を行い、**そのための条件を開発当初から検討・設定し、これらを十分に考慮して開発を進める必要がある。**

4. プルトニウムの適切な利用の確保

着実なプルトニウム利用を行っていく必要がある。
(中略)

**現在では、唯一、現実的な手段である
軽水炉を利用したプルサーマルでの対応が必要**

ちなみにこの見解を

朝日新聞2017年1月30日社説は次のように読みます。

『原子力工学者らからなる国の原子力委員会は今月、**新たな高速炉開発ではコスト面の課題を重視するべきで、急ぐ必要はないという趣旨の見解をまとめた。もんじゅの二の舞いを恐れての警告である。**』

最後に一言

うーん。警告に読めるかなあ。。。

要するに
「高速炉開発では『商業化』を念頭に置けと。
『商業化』とはすなわち「利益を得られる」と言い換えることができるので、「利益を得られるかどうかちゃんと評価しろ」と言ってるんですね。

2で、「最終的な廃棄処分のコスト等も含め」ちゃんと評価しろ、っとマトモそうなことを言っただけで、どのくちが言ってるんだ？という感じがしてしまいます。
年末に出した「軽水炉利用について（見解）」をみれば原子力委員会が原発推進しているのは明らかです。
っと言うことは、原子力委員会が『今の原発は商業化できている』=利益を得られるものだと考えているということです。
でも、今の原発だって、廃棄物処理のことを考えれば、ただ負債を将来へ先送りしてるだけで、とてもじゃないけど商業的に成立していないと思うんです。
そんな原発を推進している原子力委員会が、高速炉の開発に「ちゃんと商業化を考えると」って言っても何の説得力もないです。
むしろ、この辺を考慮した作文をしないとね、という仲間同士のアドバイスにしか見えません。。。